

# 講演内容の記事化 - 響く記事を書く2つのステップ/原則

## 1. まずは講演者の「そのままの言葉、生の言葉」を文字に起こす

講演において受け手は、講演者から概念/情報を得るだけではなく、講演者自身の考え方/考える深さ、経験から、自らを成長させる刺激を得たいと考えています。そのニーズを踏まえると、第3者が間に入る形をとり、「講演者はこのようなことを述べていた」と書くのは、記事からの学び・刺激を下げることに繋がります。また講演者の一つの一つの言葉選び、具体的な事例の描述が、刺激の材料であり、それらを抽象的な言葉でまとめる、削ることも記事の価値を下げかねません。

**Tips:** 上記を進める際の一つのテクニックとして、音声認識機能での文字起こしはとても効果的/効率的です。音声ファイルをそのまま文字起こしするソフトも存在しますが、録音のマイクが離れていたりすると、上手く文字化できないこともあります。その場合、人が音声ファイルを聞きながら、自らのiPhoneやAndroidの音声認識にそのまま語りかけると、迅速/的確な文字起こしができます。

## 2. 書き手が頭を使い、話し言葉から書き言葉への転換（簡潔化、明瞭化）、論理の整理、を行う

話す言葉をそのまま文字に起こしただけでは、読み物にはなりません。

第一に、話し言葉には、書き言葉では通常記さない意味/情報量のない単語が多々含まれ、また書き言葉よりも繰り返し表現を多用します。さらに「あれ」や「これ」など、明瞭ではない単語表現も見られます。これらを書き言葉に直さないとしても読みにくい文面になります。第二に、話し言葉では論理構造が大概緩くなります。その場の流れ、聞き手の反応を見て余談を挟んだり、話すべきことを後から思い出して付け加えたりなどします。或いは論理に飛びがあって、聞き手が推測で補うこともしばしば発生します。

これらは話を聞いているときには自然でも、文面という「形」になると受け入れ難いものになります。そのため論理構造を整える必要があります。

この「話し言葉から書き言葉への転換」と「論理の整理」は、書き手が主体となって行います。書き手が認識している文章表現のあるべき姿と照らし合わせて「書き言葉」に改め、書き手が自分の論文としても納得して出せるよう、論理構造を整理します。特に後者については、時に「話したまま」の内容を少し改訂したり、言葉を補ったりもします。そして講演者に内容に齟齬がないかを確認します。話したままの言葉というのは（特に論理の筋が通っていない場合）、実は話し手の考えをそのまま表現できていないものです。頭の中では筋が通っているはずなのに、うまく表現しきれていない。文面として形にすると本人自身が違和感を感じる。そうではなく、論理構造が整っていると、自分の考えがうまく書き表されていると感じます。書き手の力が試されるところです。